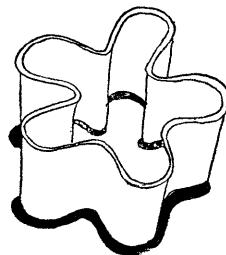


視線の過剰



森

毅

子どもという概念が確立してきたのは、おとながそれを観ることによってではなかろうか。いま、子どもは視線の過剰にさらされているような気がする。

いまでは、おとの側が、子どもに目をとどかせることが強制されている。それは、一見は子どもを保護する暖かい視線と錯覚しているが、当の子どもにしてみれば、いつも監視されている冷たい視線と取らないでもない。いつも観られているなんて、うつとうしい話だ。

古今東西を通じて、視と見の二種類があつて、視のほうでは目的意識的に注視すること、見は場を眺めているだけのような気分がある。しかも、知の

意がこめられるのは、いつでも見の側である。聴と聞についても、同様のことが言える。おそらく、目的意識的な行為はその限定の「ゆえに知につながらず、場の存在の一部であることだけが、知をもたらすのであらうか。

知の場としての学校とか幼稚園で、教育とか保育とか言うなら、その場をよき風景にすることだろ。教師や保母は、その風景のなかにあって、子どもから見られる存在であればよい。ところが、現実にはその反対に、職業的な視線が要求されかねない。子どもに目をとどかせることが、よき教師とされるのだが、それは子どもの側からすると、みずからを監視される側におくことになってしまふ。こうして、過剰な視線にさらされる存在として、現代の子どもが作られる。

もちろん、子どもが自分を見せびらかしたがるのは、よく知られたことだ。しかしそれは、この自分

のいる風景のパフォーマンスを眺められることだらう。ときに森のなかで、観客のいない舞台において、子どもは自分を見せびらかす。眺められる存在になることが問題なのであって、それは凝視されることではない。

学校で、おそらくは幼稚園でも、いま要求されているほどには、教師は子どもに目をとどかせる必要はないのではなかろうか。ぼんやりと眺めている、そして、彼らが教師の側をどう見ているかを、ひそかに気にしていて、そうした姿のほうが、ぼくには好ましい。

学校とか幼稚園とかに制度化されると、ということは、目的意識的な機能を肥大化させることでもあり、いくらかはそれは仕方がないことでもあるのだが、それでもなお、それをただの「子どものいる風景」とする視座を残しておきたい気がするのだ。